

高野山



三十三

庫文内

内閣文庫	
番號	和 28420
冊數	100 ( 33 )
函號	211 300



東京府立総合資料館蔵

明治十二年



塩尻卷之三十三

宝永



神前乃对礼

允武藝優長

二子志流の言

東大寺大殿落慶供養記

般若弘観表

兵貴拙述

十舟様よりりりり

思款正徳の女

結城氏代と稱号

惣田子林氏代と稱号

弓矢問答

秘綴紡績

惠公名迹異記

大像尺寸

観老好形

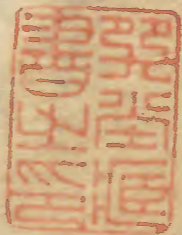
布旅氏早世悼詞

希多維為介康俊

井伊直政由来

江戶家氏代と稱号

阿波津経権倡



勢士富高の夢礼

神子月人の山莊を抄ふ

篆字の象

桃李を掲ぐ不祥を稽ふ

孟子西狩四端

村上掃部介武則

歌謡の分四首

杉原家利系圖

日向國の三徳津

等二福来と称ふ事

善如生没の月

士庶を集の序言

弘治を人の傍に抄ふ

梅榎の巻道草

明家の牌式

伊勢の神宝

世系録目

綾別のうゝ

杉原道利系圖

茶人宗易

端午の巻序

己丑天皇讓位

征伐を以て天下を治

天底立命

禮記叩の巻分

尾州節抄

前は左の神

太神字ニ稱する

友の袍こめ織の糸

孫生傳足

宋徽宗大を教を修ん

○ 神前乃射礼をぐやと称し奉射とすくに射と  
 するはしるふことと同一あり予曰是神前のこと限  
 らん凡そとすとて礼式を傳へて射を歩射と  
 して奉の字を傳傳しや正表式廿八兵記省式に曰  
 凡射衛の人等兼預歩射騎射云々亦歩射秘解一  
 卷あり其秘之を兵庫に植房の書也  
 ○ 或曰的弓は白木を用ひ塗らるる用ひし儀あり  
 若し武友の人を皆塗らるる用ひた射の儀を文官と  
 しては塗らるる儀あり式文ゆらるる兵式  
 同雉羽矢常人儀ありし人あり何の儀を  
 答明塗らるる儀あり天子の法標らるる箭四具を流

角大伊多都伎細伊多都伎木伊多都伎麻之伎  
を合とて四具より一具の箭身を双とて

其矢箱

の相を以て侍る如様と云

同弓袋鞆袋如何

善弓袋表糸帛裏紺帛此

より乃毎侍也鞆袋の相も同し物も我人等を侍り

同鞆具いりて惣ありと云

若し鞆袋を扱するに惣窠終り鞆の禱を臣下

一切に惣とて六位以下を宗乃鞆禱既鞆把禱并

繼の鞆を惣禱乃事也鞆袋を大臣を淺紫參後

以上流緋五位以下を黄包なり六位以下を鞆把禱

を用ゆるもあらず亦熊皮の禱泥を五位以上

の禱を亦なり其外はあらずの惣ありと云法曹家

の事もなるといふも香世に如く武もなるといふ位も叙

英をなるといふも事なりと云可痛む

結春よりして亦記をのこすと云ふも大肉必し此や

いふもなるといふも事なりと云

古今人信同し武夫の気象も如く似たり事

○凡そ武藝優長も性志耿介も不測水火必達所向

勿顧死生一以當百者も必し人外の能をいひて

武友も任人左右近衛府左右兵衛府名の執たり

も乃在弱よりして武業も堪りたり武友も伊志人

心も在國いりての制なり況んば戦場の時をや懦弱の

有る軍用も堪んやなりと云其思を云ふんは職

を授けしむるの才てきしむ世を治るの才を授けしむる  
武士より如童僧法師の如きも亦大徳を養ひて  
人の心より立しむるの才も同し一旦のありし何の  
用も立しむる却て大害をこゝし生し侍るべき和漢國  
廢亡の時を以て考へしむる

○ 凡男夫を穠稼をのりたるくにも存し人ふふしむる  
饑らしむるに紡績を事しむるて自も存し金も  
も収めしむるに人偏のた存するも亦也を授けしむる  
付忠を制して用も体するた工も術も守りしむる利  
もりて高しむるに農工商の才を総てしむるを授けしむる  
を私をふしむるに心をも守りしむる文武之道を

徳陸く智ぬるて存して道を以て防りしむる文  
士より此道を無きものも奉て相しむる百官は  
才て政を布しむるに計略ありて御て  
切を立しむるを武士も穠稼此業も亦也あるを授けしむる  
三軍の将も亦馬を司しむるに心も守りしむるを  
王者より世より心も武を存しむるて文を存しむる  
威を立しむるに必らしむる威を以て國を滅するに法せしむる  
文を存しむるて武を存しむる君王明しむるに心も守りしむる  
必奸のありし世を治るの才も同し威を以て國を滅するに法せしむる  
我天照左神皇孫より八咫鏡及び古羅劍を授けしむる  
の才も同し威を以て國を滅するに法せしむる

法衣傳のうふあゝ人熱く此宝殿を羨也乃四  
民を授け有り深く思ひを述べし事也

○或人予を禮吾子ニ子あり或は冠し或は成童を  
有る者も佐例して秀頼なり何ぞ傳事をもせしむ  
らる予曰秘社文章を以て歩方せしあゝ此馬の依  
て福を世にもたれんと對まことくす騎行の士  
及び劍術あをせぬ人を於て武藝を演習せしむ是  
秘社業として報國の才なりものも若他日徳考  
学文もあゝあゝ其を學ぶも任せん世も文も武  
もなきも然りしもにんをぬく事を傳へしむ  
然るものも然りし思ひありしに傳を矯て是れもあ

才をこのくく人をあゝあゝ若もくくくく下の  
矢ひをゆりしもえりく武を野ませし秘社業の業も  
津くくくは是れ伝乃道を矢ひ傳へんや男見每  
に津氣を勵まはしし悔身義の馳りも秘社業法  
かゝるいにくく人なを居しん況や武文をやあ乃  
貴くして考剛をゆりや人信もくくくくす河  
武矢くくも秘せし秘社業も而之おの本也徳川  
家の旧臣も此を先祖の高氣を矢りくくも裕盡繩  
武の子孫もいしし何そたあゝくくく干城の  
名を忘せしせんや兵毎をくく徳く君秘を唐  
て威もを困りしりもく行傳もくくく官也



を狂すものも川義ふくくし不たふ是りたり  
すもいれを此亦何をりてせん

○元興寺起勝寺當麻寺三曼荼羅の外志公未迎  
曼荼羅あり九二十尊の曼經とありて其  
持物木の片すくたふんといふ僧あり按ふ山城  
國伏見里即成徳院の源起をいふ志公一旦定法  
まてて法法を一時他ありて阿沙陀浄土の宗を  
示は於此仙工定法をて示の形像 三尊二十  
三尊  
を彫刻せしり曼をりて曼をりてありて  
其感得の像はまゝ志公崇麻の曼を上下に橋の  
一局を國畫をりたり

○南都東大寺

大殿落慶上棟儀宝永六年己丑三月十七日

大工 堀内允後橘貞長 堀内一即左門橘満正

工匠凡五百人

同月廿一日供養 自今日至四月八日 毎日法花三部  
南京密宗仏聖加持音樂

勅使 万里小路頭左大弁藤原尚房朝臣

導師 安井道恕大僧正

東大寺衆徒同末山僧侶 梅尾向山寺

安倍山崇敬寺 高山法樂寺 新栄師寺 防州

凡出僧百口

樂人五十員 兼仕十五人 小細十人

公人三十五人

舞樂十番

同廿二日

南都十三寺

僧侶凡四十八人

同廿三日

南京真言宗

九十口

同廿四日

同東川淨土真宗

六十口

同廿六日

南京西川中

五十口

同廿七日

茶師五十口

同廿八日

招提寺

七十五口

同廿九日

舞樂如初日

真福寺導師大衆院貫主隆尊

同寺衆僧一百員

衆徒二十人

中綱十人

兼仕二十人

公人三十人

南都東大寺大佛殿

金銅十六丈

廬舍那仙寸尺

御長五丈二尺五寸

面長一丈六尺

廣九尺五寸

眉五尺四寸五分

目長三尺九寸

口三尺七寸

鼻口三尺

但宮差ワタシ

螺髮ラホツ

九百六十六高一寸

頤長一尺六寸

耳長八尺五寸

御頭二尺六寸五分

肩徑二丈八尺七寸

掌長五尺六寸

胸長二丈九尺

腹長

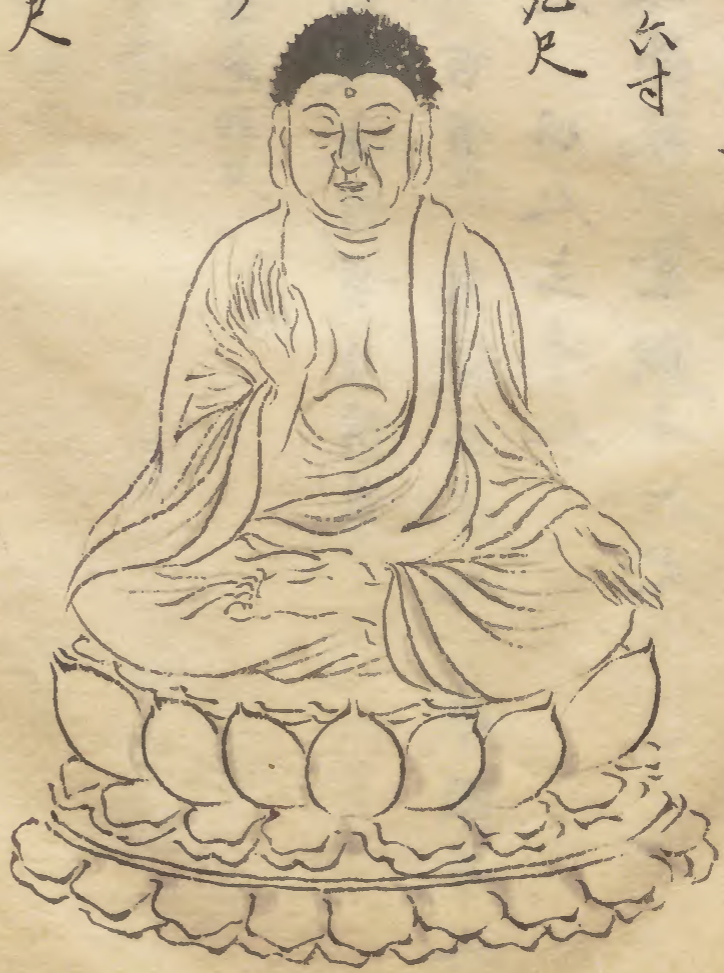
一丈三尺

肘ヨリ腕マテ

一丈五尺

臂一丈九尺

中指五尺周四尺五寸



脛二丈三尺八寸膝厚七尺膝前徑三丈九尺

足裏一丈三尺蓮華銅座高一丈徑六丈八尺

花二百八十枚悉淨土曼陀羅繪アリ周二十一

丈四尺基周廿三丈九尺土蓮華高八尺上周

三十四丈七尺基周廿九丈五尺堂高十五丈六尺

但南向

東西五十間南北三十一間柱九十六本

但木口

角柱四本木口

七尺基礎高七尺迴廊東西

九十間南北百間柱數四百七十六本鐘樓鐘

一丈三尺口徑九尺一寸三分厚八寸三分目四

万八千九百貫目也

同晦日

能州高野山衆僧凡二百餘口

四月朔日

北京智恩院尊統法親王 円理大僧正  
衆僧凡一百三十五口

同二日

黄檗山万福寺衆僧凡一百五十口

同三日

西大寺衆僧凡七十口

畑郷密宗六十口

同四日

内山僧衆六十口

同五日

菩提山僧衆五十口

谷口僧衆四十口

同六日

横州平野大念仏宗衆僧凡一百八十口

同七日

忍辱山僧衆三十九口

同八日 日向舞樂如  
初日

東大寺 向山寺 崇敬寺 法樂寺

新茶師寺

大和國中聖方凡五百員

右外毎日焼香諸宗僧侶至回向日凡一万  
三千餘口云々

水と供養の時板と彫て賣るる能はるる或は  
求め来りてを写してこゝに筆凡

○東園秩父三十二番般若船  
法性寺観音像



梅もろゝと観音もろゝ月一系陽陽亦の像皆一釋  
の道もろゝと香也一む亦我亦知那竺寺は像は  
をきしりい別と海起乃起あり一は観音像いと  
ら一河海陀亦私の像は古きと經すあり  
○凡そ観音部多く乃形像ありて亦一像乃内教  
形あり

- 正観音 千手 馬頭 十一面 準胝
- 不空罽索 如意輪 葉衣 白衣 多羅
- 毗俱胝 青頸 香王 楊柳 水月
- 阿摩提 耒迎 洒水 梵篋

此亦魚籃の観音をくろく一もその在事あり出





此を教らんとせしむるに在る介、叔父浄土寺  
乃僧とありて出家せしむるのうへに陳謝し不日、判  
發せしむ永福十一と云ふ川が板敷の目、世改八才  
浄土寺の僧、殊に乳母とて、復て三州、風来、子、逃る  
是より先、世改生母の志おの松、下、流、去、ら、ん、再、嫁、せ、り  
かよ、世改を志おまゝに、一、流、を、た、ら、ん、苦、苦、子、り、て  
成、長、せ、り、て、山、之、目、世改十五才、美、藤、の、少、さ、き、り  
神君、に、依、て、幸、し、け、り、恩、顧、あ、り、て、祖、父、の、名、を  
浄、土、寺、に、あ、り、て、井、伊、谷、に、復、せ、り、美、藤、に、松、下、を、名、宗  
と、せ、り、且、井、伊、谷、に、先、祖、歴、代、の、旧、地、と、ら、ん、に、よ、り、て  
井、伊、谷、に、今、名、を、た、ら、ん、力、に、屬、せ、り、か、き、り、し、て、幕、府

の、と、し、本、侯、清、左、衛、門、守、備、林、宗、治、右、衛、門、備、重、西、に  
最、右、忠、門、助、直、三、人、を、家、老、と、命、せ、り、し、り、て、甲、州  
は、六、國、乃、時、武、田、旧、長、一、条、山、縣、土、屋、原、四、隊、の、士、を  
屬、せ、り、あ、ま、し、り、る、尾、州、長、久、の、役、先、陣、を、領  
せ、り、し、り、る、酒、目、の、事、也、縣、亦、高、行、幸、の、日、叙、爵  
侍、從、に、任、せ、り、る、一、世、の、武、切、將、と、し、り、る、由、あ、り、は、甚  
長、七、五、二、月、卒、せ、り、る、四、十、二、才、祥、春、院、清、涼、寺、に、居  
す、り、る、也

○ 結城氏、秀郷の男、清、右、衛、門、守、備、子、常、の、六、世、右、田  
太、吏、行、政、の、裔、と、り、結、城、代、の、稱、年、と、り、

寒川 白川 山川 金山 納戸 關



平山 平方 小川 大内 小管 小田川

○宇津宮氏 法興院関白 兼家庶流 他ノ乃孫也

小田 塩谷 鷲宿 幸賀 笠間 松野

多部 築 見山 武茂 大山田 宇津

大久保

○熱田大官司家 始ハ尾張宿禰也 季範 以来藤原朝臣也 子秋氏他部カ

買セリノ三流

大官司刑部太輔忠成 大膳大夫大江廣元ノ

男ノ一ト大官司忠兼ノ嗣トカク一是太官司

始カトカク一ト以テ終セリ

駿河守晴範 卜部兼永ノ三男ノ一ト刑部右

撫之季重子也

大学助季義 三野小四ノ京義ノ一男ノ一ト

前大官司季重ノ孫子トカク

今ノ司家ハ正流ノ一ト季範ノ男星野能信ノ流ニ

星野ハ三州乃地名ノ一ト司家ノ流カトカク一今ノ

星野カクハ正流ノ一ト也

○一傍書寫阿弥陀經謂予曰袿筆ニ偈便書ニ四七

字以之

弥陀修多羅說何 一相一行正定業 一相三昧花首 經云一行三 昧文殊般若 經云

止水月圓切徳池 西嶺大王已十劫 入門便見

○法州今日の傍勢あり士富商の娯礼舅塔西家礼

依のすゝと有の如く無くして品飲食を陳て雜  
集一喧噪市のしく私辨包つるを似たり市井町  
この邊の如く福を祈ふと風をうけておぼしむる  
○士庶會集の序言道義の事人訪分乃て  
なき談もたしく馬のすこやうける語たぐいと  
世をなす人々の物ごとく菊牡丹のふりありしを  
やれしきもさうも甲府の産物を記してをさしめ  
むよあゝい時よとて平人新花をよらぬ自傷  
すりおと武家の物語りよに似けをさすもあゝまを  
わい友をさすも福をよき術男女飲食の欲りか  
たさうらゝるるも一鴉似玉もさうらゝるるをかゝぬ

酒たうくくしく酔ひ地を蕪を具侍りも淺ゆ  
○神を月の比人北山在の折つて侍り木葉落  
り風のせよもさうく時雨も月のくき將あま  
まきし自世獨りなき作籠茅舎の静なきもあり  
ゆゑ福のひ替ひよこらぬ鐘の利を度りもを  
つらぬ徳をかゝりてむすし福をりか人こらぬを  
痛もくくは世日の風折り利をふらうてさうく在  
を懐ひとを感しサキき夫も濁酒うすけらる  
こそ中へ命の内はかゝるもさうりて水おりの  
あまらぬも徳もさうて

菊葉柳徑滿庭荒 耳洗松風世慮忘

一暮一裘聊足我 何須学犬吠村庄

○ 紅葉を人の方よせりしとて

さうりしし紅葉をばさうりしあし

あささし紅葉の秋をさうりし

かし

ちよひをばさうりし秋の危んき

たすしししとてあし乃いしあし

あし人の世れささめ結核まひふりしひてさうり  
とれをばさうりしをさうりし彼をさうりしとてあし  
あしさうりし月をさうりし葉の裏をさうりし夜の秋  
さうりしをの流をさうりしとてあし

あしさうりしあしさうりしあしさうりしあし  
さうりしとてあしさうりしあしさうりしあし  
さうりしとてあしさうりしあしさうりしあし  
さうりしとてあしさうりしあしさうりしあし  
さうりしとてあしさうりしあしさうりしあし

あしさうりしとてあしさうりしあし  
さうりしとてあしさうりしあし

○ 篆象乃文字に梅花柳枝のまうりしとてあし  
磁器千人の流を用ひ剣刀の象をさうりし  
流をさうりしとてあしさうりしあし  
さうりしとてあしさうりしあし

こそ左もあつしつゝいふはさへしつゝかたすくはいりてふ  
をいしつゝあまを伴つたつてあまの道はつゝい  
ふもあまを伴つてあまの道はつゝい

○梅横より卯の花並萩萩落すその紅葉あま  
とに紅都まかきつゝいふもあまの道はつゝい  
侍の老をこといふつゝいふもあまの道はつゝい  
つ所一時的なあまの花をいふもあまの道はつゝい  
あまの道はつゝいふもあまの道はつゝい  
あまの道はつゝいふもあまの道はつゝい  
あまの道はつゝいふもあまの道はつゝい  
あまの道はつゝいふもあまの道はつゝい

つゝいふもあまの道はつゝい

○礼に桃菊を執り不祥を祓除するに菊に説文

子カガカ歴徳カをりしつゝいふもあまの道はつゝい

葉の間にあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい  
つゝいふもあまの道はつゝい

知しんま事也

○ 明家乃牌式官位も者、摘首具は度次たりも其也  
雲日首小方跗下たり者、方首方跗たり又圭首は位  
不用  
ふは士庶人

按するよと仙家の位牌としてせし日首も侍の是也  
て此の風もあはれ度土の俗なり

○ 孟子惻隱羞惡辭讓是非の心を以て仁義禮智の  
端とのもより羅豫章先生曰此公もこと人小  
あはれ然るも度の本林甫寧おたりして出の時  
於延も事有人皆人あり其れは生るを培克  
して惻隱の公なり官官の道あり阿附一福の伝

て羞惡の心より辨名利福も相傾て手は小舎者  
ちれん辭讓の心より上下高下しておる一相度  
まを是れはの心より丈一端の亡もこと人あり其れ況  
四端俱ふたはしむ和ありのをもしはれ是もを人し  
よのをもしはるや舎歎然もあらずして下は曉教の此  
を責の凶札ありの事也とのもより和漢道なき  
代はのりともはの如し人君たるもはの以理を和  
らして可なりんや

○ 伊勢太神宮神宝乃中 玉纏横刀須加流横刀跗  
形鏡形乳形の制在せし用はるる也とも國を足してさる  
すも凡そ刀剣も陽しは古代の製法もよく不知

物多し

○ 天明十八年十二月廿二日外宮先と乃時自害せし  
村と掃部助武判亦の稱、官書太史文を意本田の  
武判といひ、此時一の補正、然敷非之也、毒被辻  
記文ありん、（難）檢せよて又之も乃時とせら  
るあやむら

○ 今川家日記 蟠川親元日記

紀年録八卷 徳川家の法書を記し  
林家の体あり

關東行実録 正徳二年七月依給兼  
弟徳吉之需林氏撰之

關ヶ原合戦始末記 明慶二年依酒井徳政  
之需林氏撰之

是皆世の記録とて、大板書録として世の

浮慮林撰の信事と同し、かゝる亦、奚、亦、各、抄、記、  
考、巨、家の、日記、共、之、長、日記、竟、亦、為、中、日記、亦、信、事、  
の、後、少、き、ん、駿、府、政、事、録、元、實、日記、慶、元、を、澄、志、  
ん、の、ふ、を、之、の、林、撰、と、同、し、かゝ、り、の、や、元、祿、の、  
名、布、す、林、氏、撰、と、武、徳、大、成、の、人、同、く、及、之、り、  
ん、の、ふ、す、り、あ、ま、世、人、厚、く、て、信、事、を、考、す、  
○ 志、の、歌、す、て、あ、ま、を

きぬくの松吹ちりー怒めー  
はまもたたりけり男の初めり  
亦恨く志

かむれがうーなまの里のなま



重次 帶刀 實竹中左京亮男

女子 竹中左京亮重常妻 此外女子多シ

品道松齋 杉原助左卫門

家定 孫兵衛 木下肥後守 家紋ヨニ 二位法印

女子 秀吉公政所從位高臺院湖月尼公 寛永元年九月六日薨七十六歳

勝俊 若狹守少将 長嘯子

利房 官内少輔

利尚 沓路守

延俊 右卫門大夫

俊治 伊賀守

俊定 信濃守

延次 縫殿介

秀秋 秀吉養子 権中納言

利定 出雲守

日向國 今ハ薩 高子植津を遠日峰と云リ 後義集

九法皇の法制定也

かきしりぬ遠日の峰と云ふなり

天乃いふこの國と云ふの國

遠日と云ふ初日と同シ之を初日乃先ツ彰キ初年  
と云ふ事一ノ日命と云ふは出雲日名命の命なり  
と云ふ

茶人千宗易ハ抛登齋利休居士と稱セリ元泉物









を授けし事小神社にしては本邦より先緒あり  
又中世一徳田をたれども中世に別りたれども  
春日を神とし稱しりや終小大武甕槌命主の  
西神と天祖アマノミコの勅を奉大物之神を詔喚せりや  
身を傳へてて神を降しりや我國大勲切の武  
神として代りて天子即位の際必しは此神を告  
りし事ありしもおもひの事あり侍りし故鬼屋布  
ふ並ひて後如神春日の地は祀を奉せりや  
宜也春日の神祠を稱して神を祀りし事  
凡春日四所は神を代天乃寧瓜牙の將古切世  
結ヒトとせりし事あり

○伊豆國田方郡阿耆郡氣多知布神社式内を

天底立命として天孫の祖神たりし事

神皇產靈カミミムスヒの皇子櫛ヒ志シ乳布チの男天曾ソノ也タ

知命チノミコたり神代考カミヨの所謂天常アマノトコ立命タチノミコ底立ソコと

謂イハレりしは亦くかたしは龜のさる神たり龜

トミ糖ニハりしは神名を以て傳へたる

○我官家友の禮をこり減りしは小羅穀乃穀を  
米穀の穀とつひ公也米減りしは亦壺壺を  
つひとせしは神の道とほりしは賣の字をこ  
ツホノウチナリしは神の字をこり

山乃堅者ツツシヤ南紀の覆字フシの表とこり却

有まゝとせよ

○ 鐘をゆくと鐙鐙乃字喚鐘をくつゝ叩の字をよ  
可なり世に梓の匠をくつゝ一々やうの喚響の字をよ

史記灌吏  
の傳

○ 謀生待足何時<sup>足</sup>以未考得剛方是剛 詩書  
全書

此一聯世の望ゆる剛をくつゝいふなき人けいよ一先  
とんちんかん一考ねたのいふ

うきうきかいらんをよよ

いそちん乃たのいらわりの世と

○ 妙音後乃和國師長法形之直乃大尾法國の後  
らとよしりくらの明も直伊法の時法は剛をわき

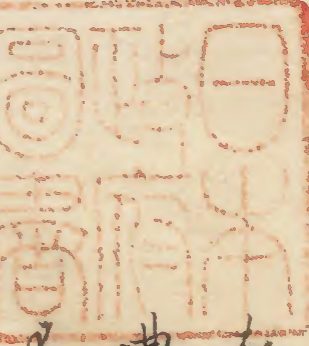
杜女若紗をくつゝして土菩の里と慕ふとすつし  
左つまをよよよとくつゝや有らんこねつゝ物なき  
まのいりつまをよよよとくつゝなきとくつゝ  
いりつまをよよよとくつゝなきとくつゝ

よのたのきくつゝの川

きりつゝの君よけい

とすしてまほくの川をよよとくつゝ村里の  
民と衣まかりて彼路路もよ小標とくつゝ  
泣をきくつゝなきとくつゝなきとくつゝ  
史集に記す一按より川といふの庄内川也 佐藤  
梅井との  
西庄の内より 伝へた とくつゝ  
庄内川といふ とくつゝ

いひくは有や尋ねし



○宋徽宗の崇寧中范致虚より書奏して天下大  
をころはるや大禁をたしむる者必刑名ありし  
曲洧回同といふ作の花物等法を世の法は最命  
をいひて因日の法もや

○嘉月六日 上申 前津唐より春日の社に詣てぬは社



の由て三輪明神の祠とて其に三輪明神を大正貴の  
神として我國大造の切を享せしめ何れよりあり  
しは初を奉り作りしや先公の法は時より  
中射圃を以てし矢習ふ所とす



